



2008.5 第2号



むくろま あきよ (学芸学部インテリアデザイン学科3回生)  
六車 安希世

- **本を読む意味**  
(人間科学部教養教育) 石川 義之… 2
- **韓国の大学図書館事情**  
(短期大学部人間関係科) 呉 知恩… 3
- **図書館原稿募集**  
(読書感想文・イラスト部門 入選作品発表)  
田辺聖子先生の作品との出会い  
(学芸学部国文学科2回生) 山下かおり… 4  
梶井基次郎『櫻の樹の下には』  
(学芸学部国文学科4回生) 濱里理央… 5
- **貴重書特集**  
本を読む、本を見る  
(人間科学部教養教育) 歌野 博… 6  
都会のセレブになれる？本『都風俗化粧伝』  
(学芸学部被服学科化粧文化専攻) 村澤博人… 8  
『海の幸』と『鸞鳳帖』  
(名誉教授) 石川真弘… 9
- **学生からの声**  
学生生活の中の図書館  
(人間科学部児童学科4回生) 池田知穂…10  
図書館と私  
(学芸学部被服学科4回生) 横山晴香…10  
本そして図書館  
(短期大学部人間関係科2回生) 北谷恵理…11  
図書館から広がる世界  
(大学院人間科学研究科人間栄養学専攻2回生) 西川純子…12  
深層からのメッセージが詰まった樟蔭図書館  
(大学院人間科学研究科臨床心理学専攻修了) 鈴木志乃…12
- **卒業生からのMessage**  
(学芸学部国文学科1980年卒業) 高畑厚子…13
- **図書館ぶっくにゆうず** ……14
- **自著を語る** —  
『祖母の伝記—女子大生のインタビューレポート—』  
(人間科学部心理学科) 鳥山平三…15
- **ベストリーダー2007** ……16
- **大学図書館ホームページ紹介** ……17
- **2007年度図書館統計** ……18
- **ライブラリアンの声／編集後記** ……19



図書館長

いし  
石川 義之

(人間科学部教養教育教授)

# 本を読む意味

## 次から次へと本が読みたくなる

学生さんはどなたも、親や教師などから「本を読め」と言われつつけてきたことだろう。私も、講義やゼミの受講生によく「本を読め」という。学生に言うからには、私自身も本をよく読む。大学教師という職業柄もあるが、これまで内外の書物を何千冊、いや何万冊読んだことだろう。テレビなどを観ているとすぐに飽きてしまうが、本というのはいくら読んでも飽きない。一冊本を読み終わるとなんとともいえない充実感があって、またすぐ次の本が読みたくなる。例えば悪いがまるで無限地獄に陥ったように次から次へと本が読みたくなる。もちろんくだらない本もあるが、概して本というのは人を魅了してやまない。本というのはどこにこんな魅力があるのだろうか。それは一口でいうと、本を読むことにとてつもない意味があるからである。この本を読むことの意味というのを、二、三私自身の読書経験に基づいてここに記してみよう。

## 「人間」を知るためのツール

本を読むことの第一の意味は、本というのが、人間が人間を知る上で格好のツール(道具)だということである。我々人間は、実は人間であることはどういうことかよくわかっていない。一般に人間とは何かがわかっていないだけでなく、自分という人間が何者かということもよくわかっていない。とくに学生さんのように青年期にある人は、自分という人間が何者であるかというアイデンティティを模索している。この人間とは何であるか、自分はどんな人間かを知ることは、人間が人間らしく、そして自分らしく生きる上で大事なことである。しかも、この答えは、人間が年取って人生経験を重ねていけばおのずと出てくるわけではない。本は、しばしばこの難問に答えるためのヒントを与えてくれる。もちろん本とて、この問題に完全な解答を与えてくれるわけではない。ヒントを与えてくれるだけである。しかし、このヒントなくして、人はこの問題に取り組む糸口さえ見いだせない。本は、人間が人間とりわけ自分という人間を知り、人間らしく、そして自分らしく生きるために欠かせないツールなのだ。

## 感動する心を育むツール

第二の意味は、本が、物事に感動する心を育ててくれるということである。いわば、本学の建学の精神の一つでもある情操を育ててくれるということだ。今日、人の命をさしたる理由もなく、絶ってしまうような殺伐たる事件が多発している。そんな事件にまでは至らないにし

ても、一般的に現代の社会は人間関係の希薄さ・はかなさで特徴づけられる。他の人間の身体や心を細かに気づかう繊細な思いやりは現代の人に欠けていると言われる。それもこれも、今の人びとに、万物の動き、自然や生命の営みに感動する心が失われていることに根因があると思う。そして、今の人びとがそうなったのは主に、現代社会が、形式合理的に構成された機械のような組織社会になっているからだろう。そんな状況の中でも、人は本を読むと感動する。文学書でなくても社会科学書や自然科学書であってもそうである。それは、一冊の本のなかに作者の魂がこもっているからだろう。多くの人が本を読んで感動の心を育てることは、機械のように冷たい現代社会を、もっと生きがいのある温かい思いやり社会に変えてくれるだろう。

## 個人的経験を超えた世界がわかるツール

第三の意味は、本というのが、個人的経験を超えた世界を知る上で不可欠のツールであるということだ。人間個人の経験できる領域というのは限られている。そんな個人の直接的な経験領域を超えた世界を書物は開示してくれる。印刷技術が発達しておらず書物のない時代の人びとは、自分が直接体験できる共同体の中に埋没して一生を送っていた。そこでは個人の主体性の発達はなかった。書物が普及し、それを通して個人的経験を超えた世界を知ることができるようになって人びとは、自分の属する共同体から離れて、自分の選り取った世界において自由に精神生活を営むことができるようになった。人間の主体性の確立である。本を通して知った別の諸世界の中から、自分の好みに合った世界を選び取り、その世界で自分の精神生活を生きるということ、これこそが人間の主体的な生き方なのだ。個人的経験を超えた世界を知ること自体は、本以外のマスメディアでも可能であろう。でも、異次元の世界の深層を知り、その中で精神を遊ばせることができるのは書物だけだと思う。本は、人間が主体的に生きる上で欠かせない媒体なのである。

本を読むことの意味はほかにもたくさんある。ただ、以上に記したような、人間とくに自分という人間を知り、他者を思いやり、同時に自分が人間として主体的に生きることができるようになることは、本を読むことの根本的意義だと思う。男女共同参画社会への動向の中で、女性の人間力が試されている。学生のみなさんには、在学中にできるだけ多くの本を読んで、この人間力を鍛えてくれるように切望する。

# 韓国の大学図書館事情

—国立ソウル大学校図書館を中心に—

オ  
知恩

(短期大学部人間関係科准教授)



## ソウル大学校について

大学図書館は人類の思索、研究結果である図書およびその他の記録類を収集・整理し、保存・蓄積するとともに、それらを迅速・正確に教員と学生達の教育・研究資料として提供する大学の中心機関である。

ここでは、私が大学・大学院時代を過ごした1980年代の韓国の国立ソウル大学校の大学図書館の事情と、20余年が過ぎた今の図書館の変化とを織り交ぜながら述べていきたい。

ソウル大学校は1946年に設立され、ソウル市の中心部の連建キャンパスと、南西部の冠岳キャンパスの2つのキャンパスからなる。連建キャンパスには医科大学を含め3大学があり、冠岳キャンパスには1975年に移転し現在、13大学がある。ソウル市の中心部にある連建キャンパス周辺は「大学路」と言われ、ソウル大学校以外にいくつかの大学が立地し、若者を対象とした文化施設が並ぶ賑やかな環境である。一方、冠岳キャンパスは冠岳山に囲まれた穏やかな広大な緑いっぱいの丘の斜面に広がり、周りには学生のための寮が点在し、賑やかな商業施設から離れ修学に相応しい落ち着いた環境である。

私が在学していた冠岳キャンパスの中心部にあるのが中央図書館である。ソウル大学校の図書館は韓国一と言われ、現在、7つの分館を含め43,894㎡の面積に、6000余席の閲覧室、300万余の蔵書と1万余の学術誌、3万3千種の電子ジャーナル、8万8千余の非図書資料を所蔵している。

## 1980年代の学生たちと中央図書館

私が社会科学大学<sup>(1)</sup>で在学していた1980年代前半の韓国社会は、長年の独裁政権下で軍事クーデターが発生し、それに対して起こった民主化運動を軍部が武力で抑制しようとしていた政治的な混乱期であった。大学では連日、学生達による民主化のデモが行われ、授業や試験のボイコットにより学生が持つ権利を行使することもあった。

大学キャンパスの中心部にある中央図書館と本部前は、学生達の集会の場であり、当時の韓国の民主化運動を象徴する場でもあった。当時、学生達は民主化運動に賛同し各種集会やデモを行った学生達と、民主化運動から距離を置く学生達に二分化されていた。思想対立で落ち着いたくないキャンパス状況の中でも、図書館の内部では貸出室や参考資料室を利用する多くの学生達の姿が見られ、朝6時から夜11時まで利用可能な一般閲覧室及び24時間利用可能な閲覧室で、図書館を下宿代わりの居場所として黙々と勉学に励んでいた学生達もいた。その学生達は、

知性の象牙塔である大学において大学生の使命は勉学にあることを体現していたのに違いない。

## カード目録からコンピュータ目録へ

1980年代の韓国の大学ではまだ図書館資料の電子化や学術情報システムが構築されていなかった時代であった。一部の資料のマイクロフィルム化を除いて、図書は著者名、書名分類によるカード目録から探して貸出が行われた。ある書籍を探して図書カードの貸出年度を見て、自分より先にその本に触って読んだ人々を想像しながら妙な競争心から本を読むこともあったし、誰も貸出したことがない書籍や新着図書を貸出して読むことで、誰も足を踏み入れていない新天地を発見したような喜びを味わうこともあった。

韓国の大学図書館における電算化は1980年代後半から始められ、大部分の4年制大学図書館は現在、殆ど電算化を終えた状態である。大学図書館所蔵の図書目録の電算化は8割以上で、図書目録の電算化は相当成し遂げられた状態である<sup>(2)</sup>。ただ、問題は、大学図書館目録の標準化がされておらず、多くの大学図書館が図書目録の典拠データベース<sup>(3)</sup>を構築していないことである。ソウル大学校は自館用典拠データベースを構築し、維持管理しており、1995年からは学術情報システム(SOLARS)の運用により、図書館所蔵目録を各学科及び研究室で検索できるようになり、1997年から中央図書館ホームページから図書館利用に関する内容をインターネットで提供している。

## 20年前と変わらない風景

電算化が進められた現在のソウル大学校の図書館は、私が在学していた1980年代とは比べられないほど教育・研究の中心的な機能を果たしつつあるが、その当時と今も変わらない風景は、大学図書館が常時、勉学に励む学生達で溢れていることである。その点は、試験期間中だけ勉強のために図書館を利用する学生達の姿が多く見られる多くの日本の大学図書館とは異なる風景であろう。常時、利用する人があってこそ大学図書館の存在理由があるのではないだろうか。樟蔭の大学図書館も知の探求者達に溢れることを望むばかりである。

(1)韓国の大学制度上の名称は、「\* \* 大学校、〇〇大学(College) △△学科」となる。社会科学大学とは、ソウル大学校を構成する社会科学大学のことである。  
(2)パク・ホンソク、イ・ジウォン(白井京、石川武敏訳)「韓国の大学図書館、典拠データベース構築の現況及び発展方法案」p2 <http://www.nii.ac.jp/publications/CJK-WS/1-7Park3.pdf>  
(3)一人の人物や一つ概念・書名を持つ、複数の名前・表記どうしを関連付けて管理するデータベース。これがあると例えば人名「ベートーベン」で検索したときに「Beethoven」の楽譜がヒットする。

# 図書館原稿募集

## 読書感想文・イラスト部門 入選作品発表

在学生を対象に読書感想文とイラストの2部門で募集した作品は、11月末日に応募を締め切り、諸作品の中から1月に館報編集委員7名による選考が行なわれました。その結果、読書感想文部門5篇のうち2篇、イラスト部門12点のうち6点を掲載いたしました。

### 田辺聖子先生の作品との出会い

(田辺聖子『言い寄る』)

やま した  
山下 かわり

(学芸学部国文学科2年生)



私は、本を読むことは嫌いではないし、本を全く読まない訳でもないけれど、人に自慢できるほど多くの本を読んではいないし、出会ってもいないと思う。樟蔭の国文学科に入って、本の一つや二つ読めないでどうすると、購入した村上春樹の単行本2冊、授業で使っていた芥川龍之介の短編集…。読み始めはしたもの、結局はどれも中途半端になってしまっている。

そんな私が出会ったのは、私達の大大大先輩である田辺聖子先生の『言い寄る』という恋愛小説だった。大学生になってどの本も読みきったためしなかった私が、なんとこの本をたった3日ほどで読み終えたのだ。こんなにも楽しくて、続きが気になって仕方がない、ワクワクする作品に、私は初めて出会った。そして、読書の楽しさを身をもって体感した。どんなに良いと言われている本を手にとっても、読者が退屈してしまえば、それは退屈な作品になるものだと私は思う。その点で、私を十二分に楽しませてくれたのだ。

#### リアリティのある恋愛小説

恋愛小説といっても、色々な小説がある。例えば、主人公には恋人がいて、二人の間に色々なことが起こり二人の絆を深めていくものや、時には恋人が死んでしまうという悲劇が待っている作品だってある。(私が今までに出会った恋愛小説というのはたいてい悲劇の多い作品だった。)でも、この『言い寄る』は、言ってしまうと主人公の恋愛観を彼女の日常を通して描いた作品で、特に大きな事件が起こるわけでもない。でもだからこそ、リアリティがあって、おまけに大人な恋愛小説だ。(恋愛経験の貧弱な私が語れないくらいに。)

「私にはまだ早い小説かな～」なんて思いながら読んでいたけれど、小説を読むことによって、主人公に

共感し、感情移入する自分がいた。小説の中で、主人公は色々なタイプの男性と出会い、交流していくのだが、この人には積極的になれるのに、あの人になると何もできなくなる、といった態度や心境がとても上手く描写されていて、何度も切ない気持ちになった。最後には、その切ないという感情で涙が流れた。本を読んで、悲劇に対する涙は何度も流したことはあるけれど、切なさから涙を流したのは初めてである。(それだけ小説の結末がとてもリアルだったのだ。)

#### 関西弁だからこそ わかりやすく読み進められた

田辺先生の作品は、私が今までに出会った作品にはないものがたくさんあった。私にとって馴染みのある関西弁で書かれていることもそうである。読みやすかったし、関西弁ならではの微妙なニュアンスも私にはとても理解できた。また、描写される景色や様子がとても細かくて、綺麗で、芸術的だったことや、違和感なく古典作品の一部がちょろっと顔を覗かす所。主人公の価値観や心境の描写も、とてもわかりやすく、こんなにも自然に読み進められた小説は初めてである。

この主人公を中心とする小説は『言い寄る』に続き、『私的生活』『毒をつぶしながら』と三部作になっている。私は『私的生活』も早々に読み終え、今は最終章を読みかかるところだ。(早く読みたくて仕方がない!) あんなに読書が退屈で続かなかった私が、今は本が読みたくて仕方がないくらいになっている。きっと、人間関係に相性があるように、著書と読者にも相性があるのだと思う。当分私は、田辺先生の作品を読むことになるだろうけれど、これからも、多くの作品を読み、新しい世界や感情を垣間見ることができたらいいと思う。

## 梶井基次郎『櫻の樹の下には』

はま さと り お  
濱 里 理 央

(学芸学部国文学科4回生)

もう、冬を間近に迎える今日にするのも妙な話だが、私は花の中では桜の花が一番好きである。最近でこそ、忙しさ故にあまりじっくりと鑑賞する機会がないまま、葉桜の時期を迎えてしまうことが多いが、私の地元の駅には大きな桜の樹が何本かあって、毎年満開の時期にはとても綺麗な桜の花が見られる。駅周辺は“桜ヶ丘”という名の地域で、名前の通り少し歩くとたくさんの桜並木があり、やはりこちら春になると、とても綺麗な桜の花たちが一斉に咲き誇り、風が吹くと花弁が雪のようにひらひら、ひらひらと舞い踊る。いつ見ても何度見ても、見る度に感動し心奪われる光景である。

### 真下で見るとはいけない

しかし、私は桜を“近くで長い間見るものではない”とも思っている。遠くから視界の端にちらり、ちらりと見る分にはいいのだ。遠くから見る満開の桜は霞のようで、ぼんやりしていて綺麗だと思える。しかし真下で見るとはいけない。真下から見るとなんだか気持ちが悪いのだ。枝いっぱい溢れかえる花には執念のようなものが感じられ、見ているこちらからも、何かを吸い取られてしまいそうな心地になる。人でも花でも、美しいものや綺麗なものは在るだけで人を圧倒するので、なまじ傍で見ていると“あてられる”のである。

鎌倉時代の歌人である西行法師は、死期を悟ったとき「桜の樹の下で死にたい」といった内容の歌を詠ったが、彼も桜の美に“あてられた”一人なのだと私は考えている。

### 桜に“あてられる”理由

西行法師の歌のように、桜の幻想的な美について扱った小説や古記は多々あるが、最近、改めて梶井基次郎の短編小説『櫻の樹の下には』を呼んで、ようやく私は桜に“あてられる”理由が分かったような気がした。

「櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる！」

これは信じていいことなんだよ。何故つて、櫻の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことぢやないか。俺はあの美しさが信じられないので、ここ二三日不安だつた。しかしいまやつとわかるとまが来た。櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる。これは信じていいことだ。」

桜の樹の下には屍体が埋まっているのである。だからこそ人は桜に惹かれ、桜にあてられるのだろう。

来年の春、私は今までと違った気持ちでまた、桜の花を見られる気がした。

## イラスト入選者一覧



竹中舞香

(五十音順)

六車 安希世  
(学芸学部インテリアデザイン学科3回生)

竹中 舞香  
(学芸学部国文学科2回生)

川畑 輝恵  
(学芸学部日本文化史学科4回生)

池上 志寿  
(人間科学部心理学科2008年卒業)

# 貴重書 特集



## 本なんか読むんじゃなかった

時々、本を読むのがいやになる。かつては、本が繰り出す、古今東西のおびただしい知識の集積が、その向こうに希望の光明を映して立ちほだかる堅牢な壁のように思いなされ、<sup>かまきり</sup>蟻螂の斧を振り立てることに情熱を燃やして、至福の時を恵まれたこともあったのだが…。ドストエフスキーの新訳文庫本が売れていると聞いて、『罪と罰』を読み返したが、かつての感動はついに蘇らず、完読にすら至らざるまま、ラスコーリニコフの魂の告白をつづる下巻は机の端に危なっかしげに捨て置かれているていたらく…それでもラスコーリニコフは、読め、と日々迫ってくるから、したたかに負債を背負い込み、取立てに追われる強迫の心理に似てくるのがいまましい。

そんな時、つくづく本を読むのがいやになる。そんな時、口をついてくるのが田村隆一の絶唱である。

言葉なんかおぼえるんじゃなかった  
言葉のない世界  
意味が意味にならない世界に生きてたら  
どんなによかったか

言葉の世界に生きるしかない詩人が言葉を拒絶せざるを得ない痛ましさ。逆説の嗜虐に満ちたこの詩句を「本なんか読むんじゃなかった 本のない世界 知識が知識にならない世界に生きていたら どんなによかったか」と、脱臼させるのは冒瀆の所業かも知れない。

書物文化史なる、ユニークだけがとりえの講義を6年続けた。レポート代わりに書物エッセーを書いてもらう。自らの読書史を回顧するエッセーのオンパレード中に、「本を読むのは大嫌い」と正直に吐露するもの

が決まって何人かいた。<sup>しゅくあ</sup>宿痾に似た、本への、読書への<sup>もうしゅう</sup>妄執を自覚する、自他ともに（他はいささか怪しい）認める読書人にとって、この直截な表明はいっそ小気味よいくらいのものだった。

本を読むのがいやになるのはいいことである。

それは、人間の営みにしかけられた弁証法である。＜反＞の契機を埋み火のように蔵せざる精神は反復の<sup>たいらく</sup>頹落に待ち伏せされる。内に否定の契機を持たない一切の営みは空虚である。反読書は、キルケゴールのいう、本来的な地点（読書の場）に不断に立ち返らせる運動としての＜反復＞の情熱を更新するからだ。

## 「読む」よりも 「見る」ことで癒される本

本を読むのがいやになるとき、時々本を見る。オブジェとしての書物は、絵画のように心を癒してくれる。西洋中世の装飾写本を英国博物館の常設展示で見たときは興奮した。<sup>じとうしよ</sup>時禱書や聖書関係の書物の、贅の限りを尽くした<sup>けんらん</sup>絢爛豪華は息をのむ美しさである。『ヘンリー獅子王の福音書』（11世紀）がサザビーズのオークションで27億円の値がつき、ギネス入りしたのもむべなるかな。ロンドンを訪れるたびに楽しんだものだが、英国図書館の新館成ってからは、気楽に拝めなくなったのは残念である。

本物を見るのが理想ながら、精巧なレプリカならアウラの<sup>いっまく</sup>一掬くくらいは期待できる。本学には、ヴァティカン図書館、エステンセ図書館に所蔵される装飾写本の傑作群のファクシミリ版がある。（『ヴァティカン図書館秘蔵本シリーズ』、『ボルソ・デステの聖書』）眼福の機会を逸するなかれ。

世界で最も美しい書物——。コンテストを行うとすれば、これら装飾写本群が真っ先にノミネートされる

のは間違いない。次いでウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスのソフィスティケーションも逸せない。

### 『鶉飼』と「ただの屋上」

日本の書物でこれらに匹敵するものとして、光悦本（嵯峨本）を上げなければならない。本学にある光悦本『鶉飼』をとくごとく覧あれ。川瀬一馬の『古活字版の研究』に徴するなら、光悦流書体をよく残した第一種本に分類されるといった能書きは野暮で、具引き雲母模様の料紙に薄水色の表紙や綴葉装（数葉を半折して一括りと、数括りを連ねて糸で綴じた装丁）の瀟洒といい、掠り筆の味わいをかもし出すマージナルゾーン（文字の輪郭が強調される印刷具合）といい、自ずからなる洗練を極めている。

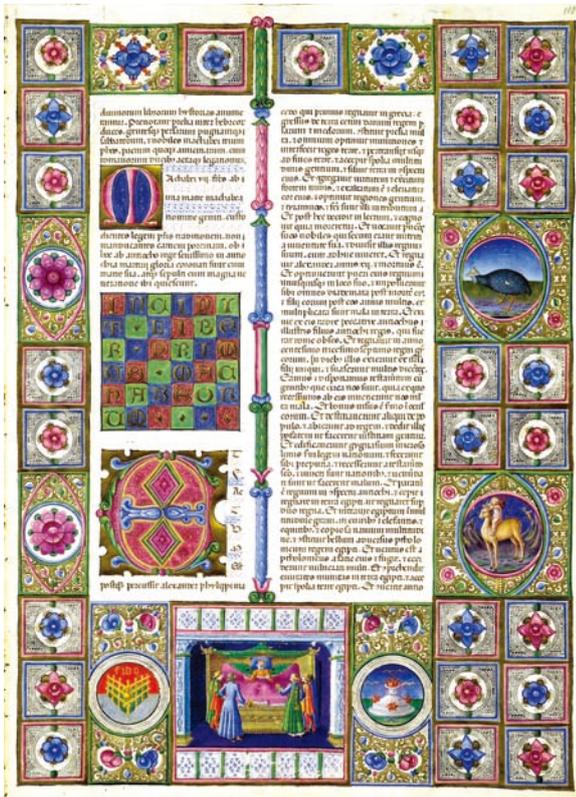
造本に映る彼我の美意識の違いはあらわだが、いずれかに軍配を上げるとすれば…。

ガウディ建築を見たときの二重の衝撃が蘇える。カーサ・ミラ（ガウディの支援者だった実業家ミラ氏の邸宅で、代表的なガウディ建築のひとつ）の波打つフェ

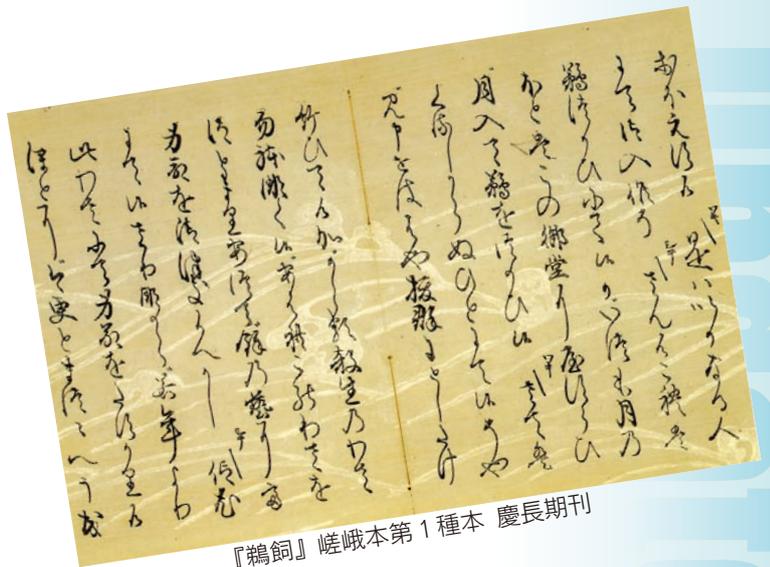
ンスに囲まれた屋上は、生命体としての自然を造形モチーフにしたガウディらしく、有機的な曲線で模倣された丘や谷や洞窟のオブジェが、かくれんぼ遊びに打ってつけのワンダーランドのにぎやかさを演出していた。夢中で見て回り、ひと休みしながらふと隣の住宅の屋上が目に入った。ただの屋上だった。四角い空虚な空間だった。なーんだ…、そうだったのか。屋上は空虚だからこそ屋上なのだ。屋上を凝ったオブジェでふさぐことはないのだ。

ガウディ建築の屋上は意味の美的過剰である点、装飾写本や、装飾写本に書物美の理想を見出したモリスのケルムスコット・プレスに通じ、光悦本は「ただの屋上」であり、「意味が意味にならない世界」に通じるものがある。かくまで対照的な両者のいずれかを選ぶのは無意味だが、「ただの屋上」に目を転じた瞬間の解放感だけは忘れられない。

（文中の田村隆一の詩は「帰途」の一部であり、『田村隆一詩集』（思潮社『現代詩文庫』1、1969年）から引用した）



『ボルソ・デステの聖書』



『鶉飼』嵯峨本第1種本 慶長期刊

**都会のセレスになれる？本**

みやこふうぞくけわいでん

**『都風俗化粧伝』**

むらさわ・ひろと

村澤博人 (学芸学部被服学科化粧文化専攻教授)

私と『都風俗化粧伝』との出会いは20代半ばであった。30年以上前のことである。大学で界面化学を専攻したことから化粧品会社の開発研究所に就職したが、化粧品よりも歴史を含め、幅広く化粧の文化を学びたいと思い始めていた。そんなとき、新聞に『『都風俗化粧伝』を読む会』の案内が掲載された。『都風俗化粧伝』を読むと江戸時代の化粧がわかるという。さっそく出かけ、末席で風俗史の研究家の話を聞いた。

このときに『都風俗化粧伝』との出会いがなかったら、化粧品会社でその後の27年ほどの文化研究がなかったかもしれないし、この原稿を書いている私も存在しなかっただろう。

**江戸時代の化粧本**

今は、その時習った風俗史の先生のお蔭で、平凡社の東洋文庫に収められ、活字で読めるようになったが、勉強会では江戸時代に版木で刷られた本のコピーをテキストにまずは読み方から教わった。もともと国語や漢文が苦手な理系に進んだはずだが、当時の美意識を知りたくてチャレンジの連続だった。

そんな思い出深く、かつ今でも活用している『都風俗化粧伝』が大阪樟蔭女子大学の図書館に所蔵されていることを知ったのは着任してしばらくしてからである。図書館のホームページにある貴重本が紹介されている特別コレクションのなかの「女子用往来目録」をのぞいたときだった。その後、しばらくして時間ができたとき、閲覧させてもらった。実はこの『都風俗化粧伝』は文化10(1813)年以来、大正11(1922)年まで6回ほど刷られた110年に及ぶロングセラーであった。

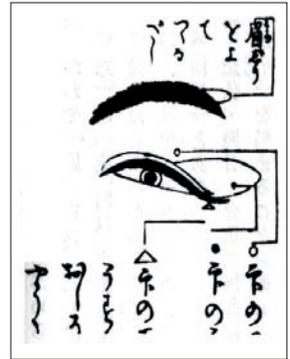
**この本を読めば****たちまちのうちに都会人**

『都風俗化粧伝』は江戸時代の化粧本である。当時の化粧法をこれほど詳しく書かれたものはほかにない。化粧とはいっても、顔の悩みの解決法、肌を白くきれいにする法、歩き方、髪生え薬、白髪染め、おしろい白粉の塗り方、背を高く見せる方など姿勢の矯正、汗や口の臭いの治し方、さらには足のしびれの治し方、大小便のこらえ方まで多岐に渡っている。そもそもこの本がどんな目的で書かれたのかを今風にかんたんに言えば、この本を読めばたちまちのうちに都会に何年

も住んでいるように垢抜けた美人になれる、となる。

では具体的な内容を紹介しよう。例えば、「眉毛を作る法」として次のように紹介されている。

「眉のつくりかた色々あれども、顔の格好によりてつくりかたかはれり。短き顔、丸き顔には、ほそく三日月のごとくにし、長き顔、少し大顔のかたには、少しふとく作るべし。…」と顔形とのバランスを考えて描くこととし、さらに、眉をつくるには上の方をはっきりと書き、下や眉先、眉尻は薄くぼかすのがこつである、と現代にも通じる内容でまとめている。流行だからとやたらに眉を抜いてしまった今時の女性はどう読むのだろうか。



「眸の低れ下がりたるを上げ、また眸の上がりたるを真すぐに見する化粧の伝」

また、上図の「眸の低れ下がりたるを上げ、また眸の上がりたるを真すぐに見する化粧の伝」「鼻の低きを高う見する伝」のように今のアイメイクにも通じる方法が書かれているのにはびっくりする限りである。また、目が細い人が無理に大きく見せようとする、「臉上がり、烏玉上に付きて空を見る」ようで見ぐるしいとか、「眼ざし怖しく、腹立顔めちからに見えるから気をつけるようにとも説いている。目力を気にしている人はご注意ください！

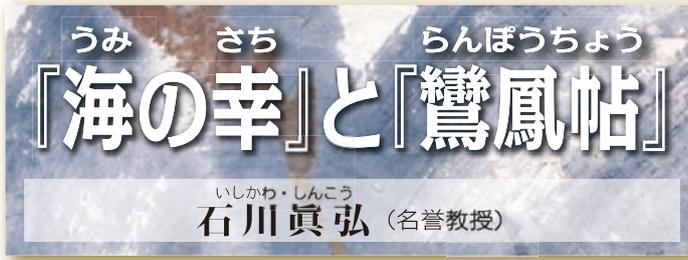
**学生・セレスの必読書かも**

昨年の11月、小阪キャンパスの記念館で開催された



「鼻の低きを高う見する伝」現代のメイクに通じる化粧法が図入りで多数紹介されている。

写真パネル展「写真でつづる 樟蔭ものがたり」を見ると、樟蔭の学生はもともとセレスだったようだ。礼儀作法も立居振舞もかなりしっかりしていたように思える。今の学生の皆さんに、せめて活字本の『都風俗化粧伝』を読んでセレスに近づく努力を！、などと願うのは、余計なお節介になるのだろうか。



## 売り物ではない、贅沢な本

近世初期庶民の間で爆発的人气を博した俳諧は、小説のように決して独りで創作する文芸ではない。座の文学と言われるように複数の人々が一座して行う文芸である。俳諧の会を催す主人が、数人の客を迎えて行う共同製作を基本とする極めて特殊な文芸である。しかも完成した作品を編纂刊行する場合、その費用は、作品の作者やパトロンの出資によった。つまり俳書の出版は、基本的に自費出版であり、小説のように本屋の売り物ではない。売り物になった俳書がないわけではないが、それは特殊な例である。俳諧の書物と小説類に使用された紙の質を比較すると、小説に用いられた紙は比較的粗末であり、俳書の料紙は上質である。費用を安くあげる売り物と贅沢に仕上げた眺め楽しむ書物の違いである。そのため俳諧の書物は、それ相当の出資をして編者の好みにより趣向を凝らし、桜の花びらの実物を散りばめた工芸品と言えそうなものも見られる。本学図書館蔵の俳書にもその種の貴重書がある。見事な版画の挿絵で飾られた『海の幸』と『鸞鳳帖』の芸術作品とも言うべき俳書である。

## 絵俳書の登場

俳諧の書物は、発句及び連句等の俳諧作品を収録するのが基本であった。しかし俳諧史の初期、北村季吟によって俳書に挿絵を添える試みが行われ、小説家井原西鶴も自撰の俳書にしばしば挿絵を仕組んでいる。芭蕉は、絵に強い関心をもっていたが俳書に挿絵を用いることはまったくなく、芭蕉系の俳書に挿絵は見られない。俳書に挿絵が本格的に登場するのは、芭蕉没

後暫くしてからである。そうした絵俳書刊行の歴史の中、宝暦十二年（1762）、勝間龍水の画をもって石寿観秀国が刊行した『海の幸』は、見事な彩



『海の幸』

色版画を配した俳書として人気を呼び、再刷り増刷が求められ、樟蔭図書館本は三年後の明和二年（1765）刊の再刷り本である。各丁画面一杯に魚介類を描き、その上部に魚介の名を読み込んだ句を収め、他に類をみない極めて斬新な絵俳書である。俳書における魚尽くしと言う趣向も珍しいが、精緻な彩色刷り絵は、後の浮世絵師たちの魚介類を描いた彩色版画に、多大な影響を与えたと言う。『海の幸』は一見博物図鑑を思わせ、本書編纂の背景に享保以降盛んになった博物学の影響があったことに注目しておきたい。



『鸞鳳帖』

## 仕組まれた趣向と時代背景を見極める

『鸞鳳帖』も、巧緻な彩色版画を挿絵に用いた稀に見る絵俳書である。筑後の俳人天籟が文化三年（1806）に京都の書林菊舎太兵衛から刊行した俳書で、句を四季別に配列し、各季の巻頭に四条丸山派の画家の挿絵を収める。挿絵の見事さは言うまでもないが、本書に仕組まれた俳諧的趣向を見落としてはならない。書名の鸞鳳は、想像上の神鳥の名、優れた人、有徳の君子、睦まじい夫婦の意味を表し、その意がそれぞれの挿絵に関わりがあるように思われる。春の部は顔を隠して桃の花を眺め楽しむ睦まじい二人連れ、夏の部は早苗を運ぶ翁と二人の早乙女を描いたお田植え神事、秋は切り取られた一本の桔梗、冬は番の鴨の挿絵である。秋の七草の一つ桔梗は、季吟著の『山の井』に「人目をしのぶ草隠れる心」を表す花とある。池の岸辺に顔を隠すように寄り添う番の鴨の後方には、橋を渡る鴨捕り権兵衛を思わせる人物が小さく描かれる。鸞鳳が意味する有徳の君子は、その徳を人前で慎ましく振る舞い隠す。挿絵に仕組まれた睦まじさや神事、また身を隠す姿は、鸞鳳の意を掠めるものであろう。俳諧文芸の研究は、俳書に収められた作品の解説のみに終わらず、当時の時代背景や俳書に仕組まれた趣向を見極めることも重要である。

学生からの **声**

## 学生生活の中の図書館

いけ だち ほ  
池田知穂人間科学部児童学科  
4回生

関屋キャンパスの図書館は、綺麗でとてもゆったりできる静かな空間です。

私にとって学生生活の中の図書館は、学習空間であるとともに、情報をエンターテイメントに変えてくれる不思議な癒しの場でもあります。

学業では、課題についての資料収集と頭の整理の場になっています。自身が課題について資料を作成し、授業で発表したりするとき、とても頼りにしているのは、やはり図書館に並ぶ専門的な本の数々です。

新たな課題 思った以上の知識  
どちらもあります

図書館に行って探すと、自身が知りたいとか調べたいと思ったことのうち、何かが得られます。また、探しているうちに、思っている以上の知識が得られたり、自身にとっての新たな課題を発見したりできます。もちろん探している本が、すぐにその場で手に入らないことも少なくないのですが…。試験の前には、友人と数人で試験勉強をしに行きます。図書館では、静かで落ち着いた雰囲気のためか、効率よく思ったよりはかどり、集中して熟考できて学習内容まで深まっているような気がしたりします。

また、AVルームなどの施設が整っていて、幅広いジャンルのDVDもあります。DVD等を自身で持ち込むこともできますが、タイタニックやディズニーなど過去に映画化されたものまであって、図書館の設備品だけでも充分楽しく鑑賞できます。わずかなひとときでも、エンターテイメントや癒しが得られてほっとした気分になれます。

## 自然に囲まれた図書館

このように、図書館は私の学生生活の中に大きな位置を占めていますし、周りの友人もそう思っているようです。関屋キャンパスのように緑豊かな場所こそ、図書館は自然の一部になることができ、静かでありながらエキサイティングな知の広がりを感じさせてくれるのではないかと思います。

これからも、この図書館は大きな存在として、私の学生生活を支えてくれると信じています。

## 図書館と私

よこ やま はる か  
横山晴香

学芸学部被服学科 4回生



私は文章を書くのが苦手だ。自分の感情や考え、伝えたいことを言葉にして相手に伝えるのは意外と難しい。でも、本を読むことは好きだ。

たくさん本が置いてある図書館では、さまざまな書き方をした本に出会える。すごく短い言葉で小さな子どもでも読めるような平仮名ばかりの絵本から、大人になっても理解できないような、漢字がたくさん詰まった難しい本もある。文庫や小説だけでなく、昔の雑誌も保管されてあるので、その時の流行がどのようなものだったのか知ることもできる。

使ってみたくなる、  
主人公の言葉との出会い

私は恋愛小説が好きなので、勉強以外では難しい本は読まない。小説は季節の表現や心情、物の例えがたくさん詰まっているからおもしろい。日常では見過ごしてしまうような光景を違う角度から誰かになりきって表現してくれる。食べ物のおいまで主人公の気持ちになって使ってみたくなる。ふだんからしたら不思議な言葉の使い方になるだろうが。

もう一つ小説のいいところは、主人公になりきれるところだろう。客観的に小説の世界を読んでいるもう一人の自分と、どこか主人公と自分を重ね合わせて小説の次元を旅している自分がある。二つの感覚から読めるのはものすごくおもしろいと思う。

## 違う立場からの見方を養うチャンス

ふだんでは起こり得ないことが起こる小説では、頭の中で想像して楽しむ。そして、恋愛小説ならさまざまな恋愛の形があって勉強にもなる。

自分の考えが正しいと考えて発言したとしても、相手がどのように言葉を受け取るかなどわからない。一方的な考えではなく、違う立場からの見方を本から学ぶこともできる。

本を読むということは、自分の知識を増やす機会でもあり、成長できる瞬間でもある。だから本は好きだ。

文章を書くことは苦手のままかもしれないが、これからもたくさん読書を読み、自分の心の財産を増やして成長していきたい。

## 本 そして図書館

きた たに えり  
北谷 恵理

短期大学部人間関係科 2 回生



### 最後から二行目で 「畏」にかかった私

私は、関屋キャンパスまで二時間かけて通学しています。ただ、電車で揺られているだけでは時間がもったいないと感じ、本を読むことにしました。初めは、何を読めばいいのか、ちゃんと読みきれのか、など考えました。本屋に行き、たくさんの種類の本を見ました。その中から選ぶのは大変でしたが、直感で一冊選んだ本が『カラフル』<sup>(1)</sup>でした。この本は、本が苦手という人も、話が淡々と進んでいくのでわかりやすいと思います。内容もおもしろく非現実的なところがあるので、想像力も湧くと思います。

そして、もう一つ、『イニシエーション・ラブ』<sup>(2)</sup>です。この本に惹かれた理由。それは「最後から二行目（絶対に先に読まないで！）で本書は全く違った物語に変貌する。必ず二回読みたくなる」という本の紹介文。私は単純に気になってしまい、読み始めました。内容は一般的な恋愛小説。ただ、本当に、最後から二行目。これを読んだ瞬間に、かなりの興奮と焦燥とで混乱しました。紹介文のとおり、私はまた読み返しました。最後から二行目を読んだことにより、一回目に読んだときと物語は全く違うものになりました。ままと、この本の畏にかかりました。それもまた、本の楽しさだと思いました。本当に、本が好きだという方に、『イニシエーション・ラブ』をオススメします。

### もちろん、お金もかかりません

しかし、本もタダというわけではありません。文庫本の場合、一冊500円前後です。一冊買うにはいいけれど、何十冊も読むとなると、たった500円でもその出費が私たち学生にとっては厳しいものがあると思いませんか？

そんな時にこそ利用すべき所が、図書館です。関屋キャンパスの図書館は外観も中も綺麗です。夏は冷房、冬は暖房とももちろん設備もばっちりです。快適に過ごせる場所だと思います。図書館には、本当にたくさんの本があります。たくさんの分野の本があるので自分に合った本が見つかると思います。レ

ポートを書くときや、卒論を書くときなども図書館ならではの静かな空間の中、たくさんの資料をコンピュータ検索によりすぐに見つけ、見ることができるとことや、何冊でも、本をいつでも読めるというところが図書館ならではの特権だと感じます。もちろん、本を読むのにお金もかかりません。また、関屋キャンパスの図書館は、本だけではなく、AVルーム・シアタールームがあります。図書館にあるDVDはもちろん、自分たちで持ち込んだDVDを鑑賞することができます。私自身、本が好きだと散々言っていますが、図書館の利用はDVD鑑賞がほとんどです。とくに私はシアタールームの大きい画面でDVDを見るのが好きです。友達を誘って映画DVDや音楽DVDなどを見ています。実際、私自身、DVD鑑賞はもちろん、友達の誕生日祝いをしたりもしてシアタールームを利用しています。

図書館というと静かで、勉強をするところ、本を読むところ、など少し堅苦しいイメージを持っている人もいるかもしれませんが、全くそんなことはありません。シアタールームに関しては防音設備もされています。本は苦手…と思っている人もたくさんいると思います。まずは、図書館を気軽に、DVD鑑賞から利用してみたいかでしょうか。

(1) 森絵都『カラフル』（理論社、1998年）

(2) 乾くるみ『イニシエーション・ラブ』（原書房、2004年）

六車 安希世  
(学生学部インテリアデザイン学科3回生)



学生からの **声**

## 図書館から広がる世界

にし かわ じゅん こ  
西川 純子

大学院人間科学研究科人間栄養学専攻2回生



幼い頃の私は、暇さえあれば童話を読んだり図鑑を眺めたりするのが大好きな子供でした。そんな私が小学校へ入り、図書館という場所を知った時、「未知なる世界への扉」を発見したような嬉しい気持ちになりました。それからというもの、図書館通いは私の日常の一部となり、大好きな小説や自然科学、旅行記などを手当たり次第に読み耽った日々を懐かしく思い出します。

中学・高校と私の図書館通いは続きますが、大人に近づくにつれ勉強やアルバイトが忙しくなり、純粹に読書を楽しむ時間が減っていきました。やがて社会人となり、仕事に追われる日々が十数年続いた私は、いつしか、あんなにも足しげく通った図書館とは疎遠な生活を送っていたのです。

## 図書館は「知識の窓」

この度、再び学生として大阪樟蔭女子大学大学院で学ぶ機会を得、久しぶりに図書館に足を踏み入れた時、図書館は私に今までとは異なる一面を見せてくれました。伝統ある小阪キャンパスの図書館には、代々の先輩方に読み継がれてきた貴重な書物が数多く所蔵されているだけでなく、最新の図書や国内外の専門雑誌、DVDなどの映像作品も揃い、常設のパソコンから授業や研究に必要な資料が効率よく検索・閲覧できます。必要な資料が無い場合は司書の方々のご助力で、他の図書館からの文献の取り寄せもスムーズに行えます。豊富な蔵書から先人達の知恵や知識に触れることは勿論、電子メディアを利用し最新の情報まで容易に入手できる本学の図書館は、今の私にとって自らの視野を広げ、知識を深め、思考をめぐらせる時間を過ごせる「知識の窓」とも言うべき場所です。

## 思う存分 本を読む時間を

一度社会人を経験した私だからこそ、学生の間と思う存分本を読む時間を持つことは、大変貴重で大切なものだと感じています。本を読むのに難しいことなどありません。自分が興味を持てる楽しい本を探せばいいのです。

どうか皆さんも、まずは気軽に図書館に足を運んで好きな本を手にとることから始めてみて下さい。あなただけの素敵な「扉」や「窓」が見つかりますように。

## 深層からのメッセージが詰まった樟蔭図書館

すず き し の  
鈴木 志乃

大学院人間科学研究科臨床心理学専攻修了

臨床心理学専攻の修士課程では2年間を通じて、心理臨床活動の訓練を積むと共に研究論文を作成します。

修士の学位を得るための論文に取り組むには、まずは自分の研究分野における先行文献を多く読むことが始まりのように思います。といっても、「自分の研究分野」を特定することさえ入学当初は正直難しく、図書館地下の集密書庫で様々な学会誌がまとめられた分厚い文献を、手当たり次第に立ち読みすることから院生生活が始まったことを懐かしく思い出します。

そうして集めた文献が本格的に日の目を見るのは、それから約1年後です。予備研究を経て本研究の調査結果を出し、いよいよ研究目的や背景を書き出す際に、引用文献として大活躍してくれます。

## 他大学から借りた本

## 挟まっていたしおりに…

またCiNii検索で興味深い文献が見つければ、相互利用の手続きを踏んで取り寄せることも多くあります。ある程度の実費負担は生じますが、遠方の大学から学名入りの大判封筒が届き、時折しおりが挿まれていることも。遠い大学院で同じテーマの研究をしている方の文献を手にとることは、とても興奮することでもありました。このようにして、研究者の卵として第一歩を踏み出せたことも樟蔭図書館のおかげと感謝しています。

ここで「図書館」にまつわる怖い話と楽しい話を1冊ずつ紹介してみようと思います。

倉橋由美子著『老人のための残酷童話』から「ある老人の図書館」。作家たちの深層からのメッセージが刻まれた本が、果てしなく積み重なった図書館の不気味さが描かれています。

小川洋子著『ミーナの行進』は全編を通じた関西弁が親しみやすく、街の図書館での司書の青年と小学生の交流がとてもかわいらしい物語です。

## その人の物語と「寄り添う」こと

ところで、ギネスブックにも掲載されている100

巻を超す世界一長い小説、栗本薫著『ゲイン・サーガ』が、関屋キャンパスには所蔵されています。登場人物の一人ヴァラキアのヨナは、信仰心の篤い天才研究者として描かれていて、厳しい指導を賜った先生方にそのイメージが重なります。

多くの物語を読むことは、心理臨床家としての訓練にもつながります。人は皆、その人だけのたった一つの物語を生きています。そして、古い立体絵本を開く瞬間のように、ゆっくりと立ち上がって姿を現す1ページ1ページの、唯一無二であるその人の物語に寄り添うことが、心理臨床家の役目と学んできました。

樟蔭図書館いっばいに詰まった先人の深層からのメッセージを糧に、人生の物語を紡ぐ人たちに寄り添う役目を果たしてゆければと思います。



竹中舞香  
(学芸学部国文学科2回生)

## 卒業生からの Message

たか ばたけ あつ こ  
高畑厚子

学芸学部国文学科 1980年卒業

学校といえば図書館。小さい頃から本が好きで、小学生の時もクラスの図書委員をしていました。「図書室」という空間に鎮座します多くの本達がかも醸し出す空気が好きで、小さいながらも大人になった様な、チョット背伸びをした、よそ行きの私がそこにいた事を懐かしく思い出します。背表紙の裏側のポケットに差し込まれた「貸し出しカード」、そこに書かれた友人や先輩の名前をたどるのも、楽しみの一つでした。

夏休みの宿題や受験勉強で利用した市立図書館は、あまりにも静かで、くしゃみ一つさえ憚られ、やはりいつもの自分ではなく、勉強好きを装う、いささかカッコウをつけた私がいきました。

大阪樟蔭女子大学では、濱崎邦子先生にご指導いただき、司書の資格を取得しました。分類してカードを作成するよりも、与えられた課題の答えを追求していくレファレンスの方が、犯

人を追いつめる刑事のようで好きでした。就職した大学では、ずぼらな性格を看破されたのか、図書館には配属されず、本当に残念でした。学校世界に勤務していながら、図書館の建物を見ているだけなんて、酷ですよ。

今は結婚して、近所の小さな図書館を利用しています。以前は咳をするのも遠慮した神聖な図書館はどこへやら。ご時勢でしょうか、けっこう普通に喋っている人がいたりして驚かされます。漫画あり、視聴覚ブースありで、随分身近になりました。

私はというと、本を購入すると小さな我が家の収納に困るので、読みたい新刊本があると図書館へ直行、「購入してもらいたい本」カードに記入して提出。連絡が入ると、いそいそと図書館へ。書棚に並ぶ前の真新しい本を手にしてニンマリ。

そう、現在、図書館は、私にとって、すっかり「普段着となった本箱」なのです。

# 大阪樟蔭女子大学図書館

## 図書館 ぶっくにゅうす

図書館を利用する方や、図書館HPを見る方はご承知かもしれませんが・・・  
毎月、図書館員が1冊づつ交代で本をご紹介している「図書館ぶっくにゅうす」  
ご覧になったことがありますか?!

図書館には、たくさんのすばらしい本があります。そっと心の疲れを休めてくれる本。  
寝るのを忘れて読みふける本。あなたが気づかずに通り過ぎた本の数々・・・  
その中から、図書館員がおすすめの本を選んで紹介します。普段、本を読む機会のない人も、手にとって頂けたら本たちも喜ぶでしょう。

図書館HP上にこんな前書きで始まるぶっくにゅうすは2005年の5月に始まりました。

### きっかけは……

- 活字離れが進む学生のみなさんに少しでもいろいろな本を読んで欲しい!
- 書架(本棚のことで)に並んでいる背表紙だけを見てもなかなか選べない!
- 図書館はカバーをはずしてしまうので内容がわかりにくい!
- 少しでも手にとってもらえるように1冊の本にスポットをあててみたい!

といった館員の声に、もちろん貸出冊数を増やしたい!!という図書館側の強〜い決意も加わって創刊号『対話篇』金城一紀かねしるかずきからの出発となりました。2007年2月現在、第37号『明日の記憶』まで実にいろいろな本をご紹介してきました。

その中には、昨年紅白歌合戦で歌われCDの売れ行きが上昇した『千の風になって』新井満まん日本語訳・皇太子殿下がご自身の誕生日に朗読された『子どもが育つ魔法の言葉』・映画でも公開された『ジョゼと虎と魚たち』『明日の記憶』・その他にも絵本や写真集、小説、中には『全国お郷ことば』・憲法9条くになんてCDつきの本まであります。

十人十色という言葉があるように、図書館員一人ひとりの好みや興味の対象もいろいろです。私達のご紹介する「ぶっくにゅうす」が少しでも皆さんの選書のお役に立つのを願って、これからも途切れることなく図書館に所蔵している本をご紹介していきたいと思っています。そうなんです!「ぶっくにゅうす」でご紹介している本はすべて大阪樟蔭女子大学図書館に所蔵しているものばかりです。図書館HPで興味ある本が見つければ是非図書館にお越しください。本があなたをお待ちしています。

(ご来館の際は、本学OPACで小阪・関屋どちらで所蔵かお確かめを……!)



川畑恵  
(文学学部日本文化史学科4年生)



# 『祖母の伝記—女子大生のインタビューレポート—』

自著を語る

鳥山平三  
とつやまへい  
（人間科学部心理学教授）

本書は、少し古くなりますが、私がかつて担当した奈良女子大学での講義「教育心理学」の宿題レポートで、女子大生たちが実際に自分たちの祖母を訪ね、祖母の肉声を記録して作文にしたものを、私が編修して公刊したものです（ナカニシヤ出版、1991年）。

そのテーマとは、「あなたの祖母の、簡単な伝記を書いてみましょう。幼児期、児童期、青年期、壮年期、そして、老年期の順に、思い出を語ってもらい、人生上のハイライトともいえるエピソード（逸話）があれば、その時の心境も尋ねてレポートにしてみましょう」という趣旨でした。提出されたレポートは200編ほどあったのですが、その中で無作為に33編を選んで、誤字脱字等を修正し、個人名や公にすべきではない事象は省いて、匿名化と秘密保持に留意して、ワードプロセッサーに入力して活字にしてみました。

およそ明治末から大正時代にかけて生を受け、すさまじい歴史のうねりの昭和の戦禍の中を生き抜いた、まさに「昭和の語り部」としての祖母たちが、一世代を隔てた孫に当たる女子大生たちに心をほどいて、気安く語りかける思いが躍動し、味わい深い「叙事詩篇」となっていることがわかります。文章や表現語句は決して洗練されたものとは言えないものもありますが、いずれも朴訥とした中にも真摯な語りを耳にしたの、孫娘が祖母たちへの敬意の念を自ずから表しているように思われます。それゆえに、この書が、名もなく位もない市井の女性たちの、明治・大正・昭和にまたがるひとつのノンフィクション・ドキュメンタリーとして、同世代の人たちには感慨深く、後世代の若い人たちには異次元感と教訓を交えて読まれれば、この資料の果たす役割は小さくないことを知る思いがします。出版後の反響は大好評で、お年寄りに喜ばれました。

## 闇市で、「お父ちゃんを買って」と子はねだる

これは、戦争が終わっても帰って来ない父親を求めて、闇市に行けば何でも買えると知った末っ子（女子大生の父親）が、祖

母にねだったことばだそうです。「子どもたちも父親を必要としていたが、一番そう思っていたのは祖母に違いない」と綴っています。

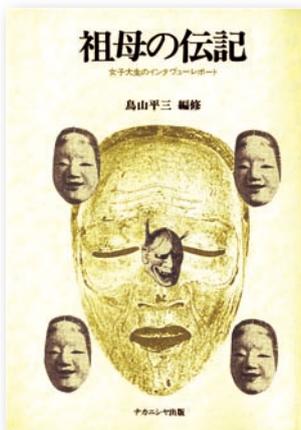
レポートの一編一編に、中心となる話題をとらえて私がタイトルを付けたのですが、たとえば、“娘人の子、嫁我が子”、“墮落ち同然の恋愛結婚”、“なさぬ仲に耐えて”、“人生のトンネルを抜けて”、“禍福はあざなえる縄の如し”、“疎開で村八分”、“丙午女は迷信を蹴飛ばした”、“お裁縫上手、芸は身を助ける”、“情けは人のためならず”、そして、“婚期を逸すると、進学に反対され”、といった見事な伝記のオンパレードです。

孫娘の唐突な願いに、最初は何を今さら回想談などと戸惑う祖母たちもいたのですが、終わって見れば自分の生涯を面と向かって尋ねてくれる人などついでいかなかったと、まじめに興味深く耳を傾けてくれる孫娘に最後は感謝の念さえ催しているのです。

## 昭和史の生き証人

明治・大正・昭和の軍国主義の暴虐や戦争の悲劇を語る女性たちの記録については、いろいろと類書にこと欠きません。たとえば、『戦争と女性』（西口友紀恵編、白石書店）があります。この本の内容は、「徴兵は命かけても阻むべし、母、祖母、おみな、牢に満つるとも」、この命のかぎりの叫びを今こそ若い世代に！」「女たちの証言集」とあります。これと同じような思いを本書の祖母たちは大学生の孫娘に飾らず素朴に語っていると云えるでしょう。今まさに「憲法9条」の“戦争放棄の条文”、が改悪される危険性があります。二度と歴史を逆行させてはなりません。本書で、それを祖母たちは訴えているのです。

同じく私が編修した『祖父母の伝記』（ナカニシヤ出版、1994年）があります。ここには男子大学生が祖父を尋ねてのレポート20編と女子大学生が祖母に問うた31編が収録されています。いずれも敬老の思いで「心の荷下ろし」を受けとめた「老人カウンセリング」のひとつときを、図らずも実現していると思われます。この書もどうぞ参照して下さい。



# ベストリーダー RANKING 2007

順位	書名	著者名
1	白夜行（集英社文庫）	東野圭吾 著
1	ステップファザー・ステップ（講談社文庫）	宮部みゆき 著
3	レイクサイド（文春文庫）	東野圭吾 著
3	ガールズ・ブルー（文春文庫）	あさのあつこ 著
5	SPI基礎ベシック 2008年版（手とり足とり就活book）	Best colleges就職部 著
5	図書館内乱	有川浩 著 / 徒花スクモ イラスト
5	今夜は眠れない（角川文庫）	宮部みゆき 著
5	夢にも思わない（角川文庫）	宮部みゆき 著
5	Separation：きみが還る場所（アルファポリス文庫）	市川拓司 著
10	死にぞこないの青（幻冬舎文庫）	乙一 著
10	The manzai 2（ピュアフル文庫）	あさのあつこ 著
10	1ポンドの悲しみ（集英社文庫）	石田衣良 著



迷宮入りした19年前の殺人事件。お互いに無関係に生きていくはずだった被害者の息子と、事件の直後に死亡した容疑者の娘の周囲で、不可解な事件が次々と起きていく。



中学生の双子兄弟だけが取り残された家に、泥棒の男が落ちてきた。奇妙なきっかけで継父（ステップファザー）になった泥棒と兄弟の可笑しくも心温まるストーリー。



家族4組が参加した、湖畔での中学受験合宿。娘のために妻と参加した男を追ってきた愛人を妻が殺したという。親たちは、死体を湖へと沈めることにしたのだが…。



17歳を目前にして失恋した理穂、病弱でも同情はされたくない美咲、いつも天才野球投手と呼ばれる兄と比較される如月。同じ高校に通う3人の、輝いていた夏のお話。



図書館の防衛部門「図書隊」の笠原郁が本を守るためメディア良化委員会と戦うバトル&ラブストーリー。現実の図書館史も垣間見える『図書館戦争』シリーズ第2作。



ある日、妻の体が若返っていることに気づき、記憶も戻りつつあることが明らかになる。夫と知り合う15歳より前にまで遡ったとき、夫は……。ネット小説の文庫化。

2007年4月から2008年2月までの貸出人数に基づいたランキングです。  
（講義のテキストとして指定されているものは除外しています。）

かんたん  
登録で

家でも  
カフェでも  
どこでも

自分の図書館  
のススメ

## 「マイライブラリ」で、学外からでも、より便利に

マイライブラリとは大阪樟蔭女子大学図書館が提供する利用者個人の専用ページです。インターネットが利用できる環境であれば、どこからでも利用できます。

### お知らせ

図書館からのお知らせを確認できます。



### 新着情報



あらかじめキーワードを登録しておく、関連する資料が図書館に入った時、その情報を見ることができます。

### 借用中の資料



今、借りている資料のリストや返却日を確認できます。

### 入手待ちの資料



自分が予約した資料の状況を確認できます。

### マイフォルダ



OPACでブックマークをつけた資料をこのフォルダに保存することができます。登録した資料を参照したり、テーマ別にフォルダを作って整理したりと、幅広く利用することが可能です。

かんたん

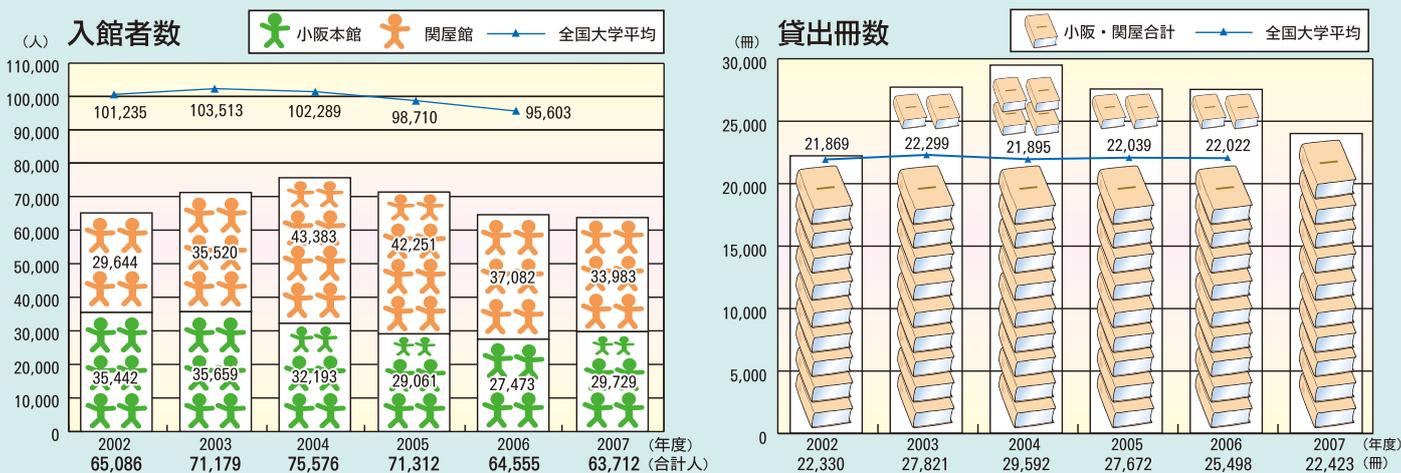
マイライブラリを  
利用するには…

まず登録が必要です!!

IDとパスワードをお渡しします。  
申し込みの詳細については  
図書館カウンターでお尋ねください。

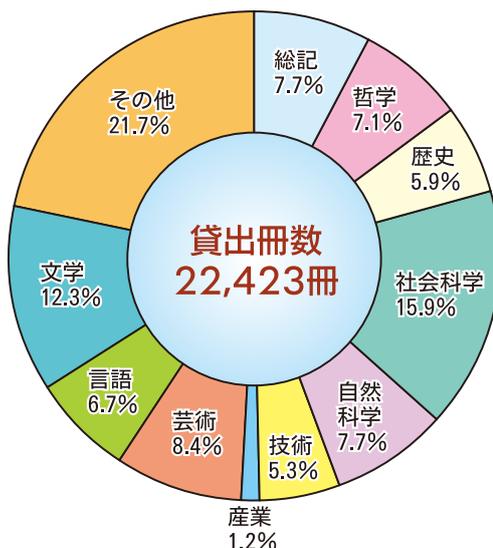
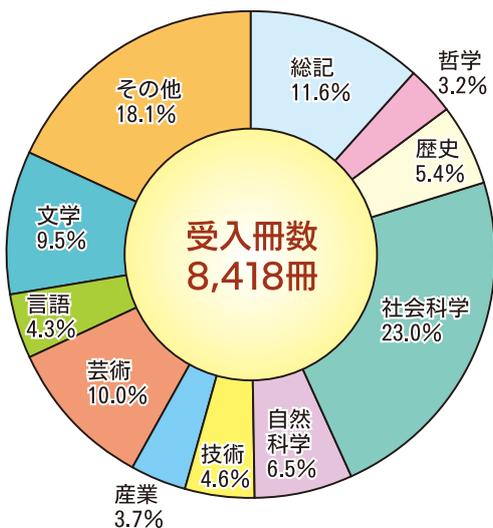
## 年度推移

(入館者数・貸出冊数は2007年4月から2008年2月末日までの合計)



過去6年間で見ると、2004年度をピークに減少傾向にあった入館者数が、2007年度は前年度並みとなりました。今後、小阪本館を中心に設備の整備・充実をしていく予定です。入館者が最も多かった月は、春期の期末試験やレポート提出の時期である7月(9,823人)で、卒業論文が提出される1月(6,510人)がこれに次ぎました。貸出冊数は減少傾向にあるものの、全国大学平均よりも高いところで推移しています。

## 分野別



2007年度の受入冊数(購入などにより新たに蔵書とした冊数)と貸出冊数の分野別割合です。受入冊数では、ライフプランニング学科の設置に伴い、社会科学系資料の割合が増加しました。分野のうち"その他"には旅行ガイドブックや文庫本、資格・就職関係などが含まれ、貸出冊数の約5分の1を占めています。

# ライブラリアンの声

## 以文会友

雪のちらつく2月、京都文化博物館で行なわれた「川端康成と東山魁夷—響きあう美の世界—」に出かけました。日本を代表する作家と画家の作品の素晴らしさはもちろん、二人の手紙のやり取りからは深い心の交流が伺われます。そして息をのむようなコレクションの数々。

が、最後の川端康成の力強い「以文会友」の書を見つけた時、それまでの空気が一瞬ほころぶような気がしました。もとは論語の「君子以文会友、以友輔仁（君子文ヲ以ッテ友ト会ス、友ヲ以ッテ仁ヲ輔ク）」の一部分で、学問によって友に出会い、これによって得た友は互いの人間性を高めていくことができるというような意味です。ここでいう「学問」とは“知識”というような広い意味を持っています。

これと同じ言葉の書かれた額が、小阪図書館の2階に掛けられています。

現在は本や雑誌だけでなく、インターネットをはじめとした情報で溢れています。その中から信頼できる必要な情報を取り出すには知識や技術が必要です。おおいに先生や友達と心を通わせ、そして図書館員を使ってください。それがお互いの一生の出会いとなるかもしれません。

また、図書館のホームページに自分専用のページをつくることのできる、マイライブラリについて今回の館報で紹介しています。他にもレポート作成や学内限定で利用できるデータベースなど、利用のしかた、興味のある方はぜひ図書館のカウンターでお尋ねください。（編集担当：岩崎友香子）

## 成長する有機体モドキ！

図書館学の授業で必ず習うものの一つに、インドの図書館学者が1931年に記した「図書館学の五法則」があり、その第5法則には「図書館は成長する有機体である」とあります。ここでいう「有機体(organism)」とは臓器が協調して動くことで生存する、生物のような存在という意味です。

さて、図書館を含む学術情報機関のなかには、それ自身がマスコットキャラクターという「有機体モドキ」を飼っているところがありますのでご紹介します。

初めに、大学図書館がお世話になっている国立情報学研究所(NII)から。猫のプワン、小鳥のピョ太郎、エゾリスのチェップ、モグラのモグ蔵が、ホームページや便箋、布バッグなどに出現します。これら4匹の(同じ作者による)兄貴分として東京大学附属図書館の図書館報に登場したのち、NIIのウェブサイトにも友情出演？しているのが鳥のワックと、カップのペンテです。(同館の自習用ページ「ネットでアカデミック on Web」にも登場します。)

つきからは端折ながら。北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)の鳥の、はすかっぷちゃん、筑波大学附属図書館の蛙のがまジャンパー、和光大学図書館の牛のワコちゃん。名前が無いキャラクターとして、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションのオカメインコと、東京学芸大学E-TOPIAのライオン、そして山口大学学術機関リポジトリYUNOCAのロゴには狐らしいキャラクターが使われています。二次元から次元を上げれば、米アイオワ州のスベンサー公共図書館の公式メンバーになった雄猫のDewey Readmore Booksくんがいました。しかしこのすばらしい名前の彼は、一昨年冬に返らぬ猫となりました。

余談ながら、図書館小阪本館の1階にある田辺聖子文学館の展示スペースにはリサとガスパール、そして大型のスヌービーがいて、前を通るたびその視線に癒される思いがします。さすがにどれもマスコットにはできませんが、この文学館の「主」たちに会いにきてください。（編集担当：糸野泰輔）

## 編集後記

ここに、2才の誕生日を迎えた『こかげ』をお届けいたします。昨年の創刊号について、学生さんの一部にアンケートをとり、いろいろな意見をいただきました。樟蔭の貴重書を紹介してほしいというご意見をうけて、今回は「貴重書特集」が実現しました。また、読書感想文とイラストの募集を行いましたところ、2点の読書感想文と、6点のイラストが紙面を飾ってくれました。さらに、寄稿をお願いした卒業生の方、在学生のみなさん、先生方が心よく原稿を書いてくださり、そのうち何人かの学生さんは、顔写真も提供してくださいました。一方、ライブラリアンの声も実現し、2号の『こかげ』はぐっと立体感が出たような気がします。このように、『こかげ』は皆さんの協力によって、順調に育っていています。いま、この『こかげ』を読んでいるあなた、つぎの3号はご自分の手で育ててみませんか？どうぞ、応募や寄稿に積極的に参加して、『こかげ』の成長を実感してください。今後とも何卒よろしく願いいたします。（高橋晴子）



池上志寿 (人間科学部心理学科2008年卒業)

はばたけ、知性。



# こかげ



## 大阪樟蔭女子大学図書館報『こかげ』第2号

発行日 2008年5月1日

編集 大阪樟蔭女子大学図書館報編集委員会

発行 大阪樟蔭女子大学図書館

小阪本館 大阪府東大阪市菱屋西4-2-26 TEL.06(6723)8182 FAX.06(6723)8387

関屋館 奈良県香芝市関屋958 TEL.0745(71)3158 FAX.0745(71)3148

ホームページ <http://library.osaka-shoin.ac.jp/>